

# 土木紀行

## さこはいすいじょう 佐古配水場

とくしまけんとくしまし  
徳島県徳島市

### はじめに

佐古配水場は、徳島県徳島市の閑静な住宅街にあります。旧ポンプ棟は、ヨーロッパ風の赤レンガの建物で、徳島市の水道施設の中では最も古い由緒ある施設です。また、厚生労働省の「近代水道百選」、土木学会の「近代土木遺産」、平成9年には、徳島県で初めて国の登録有形文化財に登録され、さらに源水井、集合井の2棟も平成10年、登録有形文化財に登録されています。



旧ポンプ棟

### 良質の水に恵まれなかった徳島

徳島市は、吉野川の下流に位置し、小さな川が縦横に流れ、美しい島に見えることから、美称の徳を付けて徳島と名付けられたといわれています。また、水の都と呼ばれています。

このように、水に恵まれたイメージがある徳島ですが、井戸水に頼っていた大正時代までは、赤痢や腸チフスなどの伝染病がたびたび発生し、全国平均を上回る死者が出ていました。

### 近代水道への期待を込めて

明治40年、当時の徳島市長一坂俊太郎は水道布設の抱負を述べ、水道界の権威者で河川式水道を得意とした東京帝国大学教授の中島鋭治工学博士に調査および設計を依頼しました。

明治43年から調査を開始し、17年の歳月をかけて大正15年9月、佐古浄水場は完成しました。当時の徳島市の年間予算の3倍にあたる260万円という巨費を投じた一大事業でした。給水人口は約24,000人、徳島市民の28.7%が水道を使えるようになりました。また、完成を祝って盛大な通水式が行われ、時の市長矢野猪之八は「こんこんたる清水が全市を貫通した」と、その喜びを表現しています。

### 旧ポンプ棟の外観と内部

旧ポンプ棟は、柱は鉄筋コンクリート造りのレンガ貼り、天井が高く、壁は赤レンガのイギリス積み、白い半円形のアーチ窓に、入口上部の正面



旧ポンプ棟入口

壁には美しい浮き彫りの装飾が施されています。紋様は、徳島市の市章と「粟」を組み合わせデザイン化したものだそうで、粟は忌部氏（古代の朝廷祭祀を担当した一族）によって徳島に伝えられたとされています。玄関の上にはバルコニー風



集合井



源水井

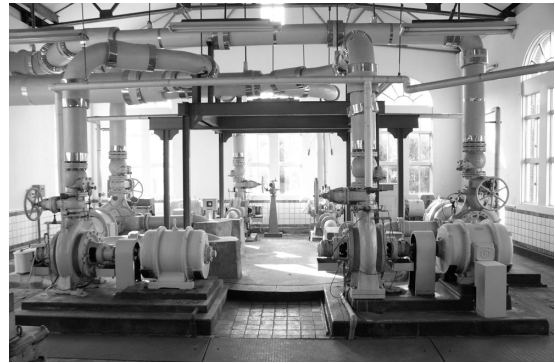
の飾りもあり、中に人が住んでいるのかと思わせるほど洒落ています。

同時期に造られた集合井も、ポンプ棟と同様のレンガ造りで要所に花崗岩を配し、入口上部の浮き彫り装飾や柱なども旧ポンプ棟とマッチするように、きめ細かな配慮がなされています。

その奥にある源水井も、景観に配慮するためコンクリート構造の上にレンガを貼り付けてあり、井戸の上屋としては珍しい建物です。

ポンプと発電機を入れる施設や井戸の上屋に、これほどきめの細かな飾りを施した建物を造ったことは、当時の水道がいかに貴重なものだったかを物語っています。

建物の内部は漆喰仕上げで、桁行き24m、梁の間はおよそ12m、間仕切りや柱もなく、半円形の窓から光が射し込み、明るく広々としています。発電を行うためのエンジンは、当時としては珍しいドイツ製の400馬力のディーゼルエンジンで、ほかに受配電盤などがゆったりと配置されています。現在は、新しいポンプ場ができたため、国産のエンジンに更新されており、災害などの停電に備えた非常用自家発電装置が、いつでも動かせる



旧ポンプ棟内部

よう手入れされています。

## 市民皆水道化の一翼を担う

佐古配水場は、広さ約13,000m<sup>2</sup>の広大な敷地に、旧ポンプ棟のほか、新しい管理棟や浄水タンク、調整池、倉庫などがあります。浄水タンクや管理棟は、旧ポンプ棟と調和する赤レンガ色に統一され、かなたに眉山を望む素晴らしい景色です。



新しい管理棟

昭和元年、およそ83,800人だった徳島市は、80年後の現在、261,000人を超えるまでに発展しました。戦前、戦後の相次ぐ水道拡張事業により、水道の普及率は現在91.2%に達しています。

その原点ともいべき佐古配水場は、今も徳島市民に安全な水を送り続けるシンボリックな存在です。

### 【交通】

- ・徳島自動車道徳島 IC から車で20分。
- ・徳島空港から車で30分

### 【問合せ先】

- ・徳島市水道局 経営企画課 広報企画係  
TEL 088 623 2419